

『学校力向上に関する総合実践事業』コーナー その8

先月に引き続き、外部からの継続的な指導助言及びそれを踏まえた教育課程・指導方法等の不断の見直しを進めることをねらいとしている「外部アドバイザーによる指導と助言」について紹介いたします。

本校では、11月4日（金）、学校力向上に関する総合実践事業の道外アドバイザーの一員である東京大学大学院教育学研究科 教授 市川 伸一 氏を招き、アクティブ・ラーニングと「教えて考えさせる授業」についての教育講演会と本校職員による公開授業を行いました。総勢43名の参加者による研修会でした。

【教育講演会より】

1 「教えて考えさせる授業」で伝えたい学び方

○意味理解：知識の関連づけを大切に

- ・断片的な知識や解法の機械的暗記からの脱却
- ・「そもそも（定義）」「なぜ（理由）」を考える習慣

○失敗活用：間違いを活かしながら学ぶ

- ・なぜ間違えたのか、何に気づかなかったのか。
- ・失敗は、自分の学習改善のための貴重な情報源

○メタ認知：自分の理解状態や学習方法をみつめる

- ・理解診断の方略としての説明活動
- ・この授業でわかったことは何か（自己評価）

2 授業づくりのポイント⇒困難度査定

○子どもにとって難しいところにこそ、時間と工夫を

○教える場面の工夫…コンパクトに重要な点を

○理解深化問題の工夫…課題のレパートリーを広く

3 「教えて考えさせる授業」における協同学習

○理解確認：教師の教えたことがわかっているか

- ・類題を解く場合：答え合わせ／教え合い
- ・説明を求める場合：早めに説明へ／できるだけ自分の言葉で

○理解深化：相談しあって協同解決へ

- ・自力解決の時間は短めに
- ・考える材料はていねいに
- ・「教える」の場面でヒントの用意

○育てたい資質・能力：対話力、発表力

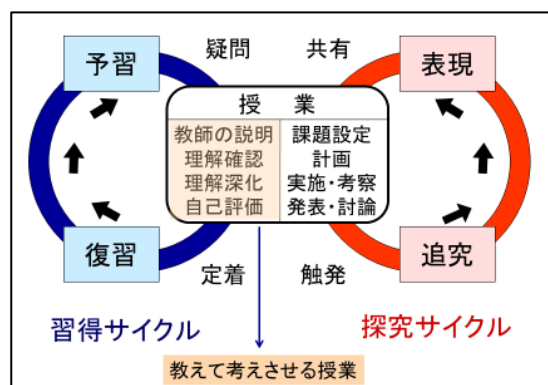
- ・説明する、主張する、質問する、反論する

4 アクティブ・ラーニングとしての「教えて考えさせる授業」の位置づけと意義

＜アクティブ・ラーニングをどれだけ入れるか＞

○探究的学習は、まさにアクティブ・ラーニング。しかし、系統的な習得的学習とのバランスが重要。習得的学習の中でも、アクティブ・ラーニングの視点は必要。

○教師の教授活動にアクティブ・ラーニング（理解確認・理解深化）の視点をバランスよく位置づけ教授活動を進めることは、「教えて考えさせる授業」としても重要である。として講演会を通して指導方法の工夫・改善と実践の積み上げの重要性を参加者一同学びました。



「教えて考えさせる授業」は、基礎知識は教え、思考・表現を通して深い習得を促します。